

第四章 現 実 的 苦 行 (四)

つぎに自分(王仁)の第一に有難く(難有く)感じたのは水である(った)。一週間とい
うものは、水一滴口に入れることもできず、咽喉は時々刻々に渴きだし(いて来て)、何と
も言えぬ苦痛であつた(る)。たとえ泥水でもいい(好い)、水気のあるものが欲しい。木の
葉(木の葉)でも噛んでみたら、少々くらい(位)水は含んであるであらうが、それも一
週間は神界から飲食一切を禁止されておるので、手近にある木の葉一枚 さえも、口に
入れるというわけにはゆかない(ぬのである)。その上時々刻々(日々刻々)に空腹を感じ
(で)、気力は次第に衰えてくる。(も衰ろえ) されど神の御許しがないので、お土の
一片も 口にすることはできぬ。膝は崎嶇たる巖上に静坐せることとて、是くらい痛く
て苦しいことはない。寒風は肌身を切るようであつた(る)。

自分(王仁)がふと空をあおぐ(向く)途端に、松の露がポトポトと雨後の風に揺られて、
自分(王仁)の唇辺に落ちかかった。何心なくこれを嘗めた(口にした)。ただ一滴の松葉
の露のその味は、甘露とも何ともたとえられぬ美味さであつた。

これを考えてみても、結構な水を火にかけ(て)湯に沸して、温いの熱いのと、小言を言っ
てい(お)るくらい勿体ないことはない。

仁愛の大神業……みろくの神の大神業となれば、聖師さまのお働き以外にはありませんね。

惟神靈幸倍坐世……神様のみ心のままにみ幸はえを賜りませ。つまり自分の欲するようにして欲しいという「人ながら」の願い事ではなく、すべてを神さまのみにお任せしますということ。

草木の葉一枚でも、神様の御許しが無ければ、戴くことはできず、衣服は何ほど持つておつても、神様の御許しなき以上は着ることもできず、あたかも餓鬼道の修業であつた。その御蔭によつて水の恩を知り、衣食住の^{たいおん}大恩^{だいおん}を^{さと}覚^さり^し、^{ぜいたく}贅^ぜ沢^{たく}なぞは夢にも思わ^なず^あぬ^め様に、^あど^んな^あ苦^く難^{なん}に^あ逢^あつ^たも^あ驚^{おどろ}かず、^{かな}悲^{かな}しま^ず、^{はんたい}い^かなる^{はんたい}反^{はん}対^{たい}や、^{ねっば}熱^ね罵^ば嘲^{ちやう}笑^{せう}、^{しやうねっば}笑^{せう}熱^ね罵^ばも、^{もつたい}た^だだ^あ勿^あ体^あない、^{ありがた}有^あ難^あい^あ有^あ難^あい^あ、^{ありがた}難^あ有^あい^あく^あで、^{へいき}平^へ気^きで、^{しゃかい}社^{しゃ}会^{かい}に^{たいぜんじやく}泰^{たい}然^{ぜん}自^じ若^{やく}、^{かんじや}感^{かん}謝^せの^{せいかつ}み^の生^{せい}活^{かつ}を^{たのし}楽^{たの}む^{たの}こ^{たの}が^{たの}で^{たの}き^{たの}る^{たの}よ^{たの}う^{たの}に^{たの}な^{たの}つ^{たの}た^{たの}の^{たの}も、^{まつた}全^{まつ}く^{まつ}修^{しゆ}行^{ぎやう}の^{あか}御^あ利^あ益^げで^ある。

それについて今一つ衣食住よりも、人間にとつて尊く、有難い(難有い)ものは空気である。飲食物は十日や二十日くらい廃したところで、死ぬような事はめつたにないが、空気がただの二三分間でも呼吸せなかつたならば、ただちに死んでしまふより途はない。自分(王仁)がこの修行中にも空気を呼吸することだけは許されたのは、神様の無限の仁慈であると思つた(であつた)。

人は衣食住の大恩(大恩)を知ると同時に、空気の御恩を感謝せなくてはならない(ぬのである)。しかし以上述べたところは、自分(王仁)が高熊山における修行の、現界的すなわち肉体上における神示の修行である(ります)。靈界における神示の修行は、到底前述のごとき軽い容易なものではなかつた。幾十倍とも幾百倍ともしれぬ大苦難的修練であつた。

餓鬼道……悪業の報いから飢渴に苦しむ
幽界の道。

本 居 宣 長

からさまのさかしら心うつりてぞ

世人の心あしくなりぬる

しるべすと醜のものしりなかなかに

よこさの道に人まどはずも